

2025.7.1 No.5

HIOKI財団 通信

HIOKI奨学・緑化基金 事務局

奨学金に託された願い

公益財団法人 HIOKI 奨学・緑化基金

業務執行理事 若林昌二



今年も華やかに桜の花が咲き誇る中で、新年度が始まりました。活力に満ちた希望の季節です。

大学生を支援する全国の奨学金基金は、公益団体や自治体だけでも 1000 団体を超えるそうです。その多くの団体は、奨学金給付の趣旨を「経済的に困難で優秀な学生の修学を支援する」と述べ、社会への大きな貢献として尊敬を集めています。

そんな中であって、HIOKI 奨学・緑化基金の「設立の趣旨」は、異色を放っています。HIOKI 財団の設立の趣旨を要約すると、「国際化の時代を迎え、科学技術の振興が緊急かつ重要な課題となり、科学技術の基盤を一段と強固なものに高めていくために、理工系大学生の人材育成をし学術の振興をはかる」と謳っています。個人の経済的支援はもちろんですが、国の将来に対する問題意識に立って、設立の趣旨を述べている基金は他には知りません。設立当時の関係の皆さまの高邁な見識に、あらためて敬意を表します。

財団法人 HIOKI 奨学・緑化基金は 2005 年に発足しました。(2010 年公益財団法人に移行) 現在、長野県出身の向上心あふれる優秀な理工系学部の大学生を毎年約 30 名を採用し、月額 8 万円の奨学金を給付しております。さらに大学院修士課程・博士課程の院生にもその枠を広げ、最長では 9 年にもわたる給付となります。奨学生の採用選考に関しては、県内各高校から最大 5 人までを推薦して頂き、「高校時代等過去の実績」「現在の学力到達度」「未来を切り開く将来性」等、多様な観点で丁寧に審査しています。選考過程において奨学金給付の趣旨の理解が深まるよう配慮するとともに、優秀な高校推薦者であることを心して、できる限りの公平・厳正な選考に努めております。

財団では、奨学生の奨学金受給資格を確認するために、近況報告や成績書類を注視しています。奨学生の近況報告から、一部だけですがご紹介します。「1 年生。とても充実した日々を過ごしている。学習内容はレベルが高いうえ、好奇心をそそられる内容が多く、授業がとても面白い。」「2 年生。有機化学等は、理解が追いつかない部分があり、納得のいく成績がとれなかった。一層学習に力を入れていきたい。」「3 年生。学生実験が始まり、格段に忙しくなった。毎日友達と大学に残り、協力しながら問題を解決している。全ての単位を A 評価以上で取得できた。」「4 年生。自立移動ロボットに関する研究に勤しむ毎日だ。少しずつだが立体設計やプログラム作成などの理解が深まってきている。」修士課程奨学生からも、「家庭の厳しい経済状況の中で、諦めかけていた大学院進学を実現できた。」「奨学金のおかげで研究活動に全力を注ぐことができた。国内外の学会発表に多数参加し、学生優秀講演賞をいただいた。」など、努力と感謝の気持ちが読み取れます。こうした近況を載せた「財団通信」を奨学生や高校にも配信していますが、彼らの努力や頑張りが他の奨学生や高校生への勇気や励ましとして受け取ってもらえたら幸いです。

春の街並みを彩る桜の花も、開花するためには厳しい寒さに十分にさらされることと、その後春の暖かさを一定量蓄えることが必要だといわれます。美しい花を咲かせるには、厳しい時代を耐えて、しっかりと力を蓄えていくことが必要だ、というのは人間も同じですね。

奨学生の皆さんには、意欲を持ってますます自分の可能性を高め、いつか希望を叶え、社会にも大きく貢献していつてくれたら・・・、とそんな姿を夢に見ています。

(わかばやし しょうじ 元上田高等学校長)

□奨学生の皆さんの「近況報告・大学生活を振り返って」よりご紹介します。

慶應義塾大学 理工学部 2年 R.Sさん

大学入学より一年が経ちましたが、今学期意識したのが「挑戦する」ということです。授業の内容は完璧にこなしつつも、それだけにとらわれず自分の成長につながることに積極的に取り組んでいます。

一つ目に、東京大学松尾研究室のグローバルインテリジェンス寄付講座の受講・修了があります。機械学習を用いたデータ分析を学べる講座であり、python でプログラミングをし、ビッグデータを扱えるようになりました。最終課題はかなり難解でしたが、自分の頭で深く考えることで、なんとか修了することができました。

二つ目は、世界遺産検定への挑戦です。これからの AI が台頭してくる社会においては、自分の個性を高めることが必要だと思っています。そのために視野を広げ、広い教養を身につけようと思いました。学習を進める中で、文化の違いなども見え始め、大変意義深かったです。

これからも引き続き、社会に価値を創造できる人材となるべく様々なことに挑戦し、成長していきたいと思っています。

東北大学 工学部 3年 Y.Nさん

前期の学期 GPA が 3.75 だったこともあり、累積 GPA が 3.208 となり、半年早期卒業の基準 GPA である、累積 GPA が 3.30 のボーダーがみえてきました。来期の成績次第ではありますが、半年早期卒業を目指して学習を進めたいと思います。

また、浪人中を含めれば3年間学習してきたドイツ語ですが、未だに検定など、目に見えた資格を取得していないので、今年度は挑戦してみようと考えています。現在、ドイツ語に限らず、様々な言語に興味を持ち始めていて、高校までとは異なる会話に重点を置いた英語学習や、新しく韓国語を学習し始めるなどしています。

2年間所属している野球部には今後も在籍し、日々努力を続けています。その関係で、学部生でいる間は留学をすることができないのですが、大学院で留学するために半年早期卒業をして、その半年を有効活用する予定です。

まだまだ大学生活で学びたいこと、体験したいことがたくさんあるので、今後ともご支援のほどよろしくお願いします。

京都大学 工学部 4年 Y.Hさん

4 回生から研究室に配属され、キャンパスも代わり全く新しい生活を始めています。大学入学の時から興味を持っていた生体機能高分子研究室に所属できることになり、より一層研究活動へのモチベーションが高まっています。

私の研究室では、ナノ粒子やタンパク質を使って医療技術への応用を研究が進められています。今はまだ基礎知識が少なく、先輩の話を理解するのがやっとという感じですが、これからもっと基礎実験や学習を重ねて、卒業論文作成に向けて頑張っていきたいと考えています。

夏には大学院試験も控えているので、これまでの授業の復習を少しずつして、対策していこうと考えています。新生活で慣れないことばかりですが、新たな出会いも沢山あり、日々新しい発見を楽しんで生活出来ています。また、課外活動としてオーケストラの活動も精力的に取り組んでいます。

私生活では、春休みをきっかけに、カメラやボールペン字、ジムでの運動をはじめ等、充実した日々を過ごしています。

HIOKI財団は、今年も上田市や千曲市の植樹祭等に約3000本の苗木を寄贈し、植樹活動にも参加しました。



写真は千曲市植樹祭にて

2025.5.10

北海道大学 大学院 情報工学院
修士1年 T.Nさん

1年次はコロナ禍の影響でオンライン授業ばかりで、大学生になった自覚もいまいち芽生えきらないまま学んでいましたが、2年次以降専門が深まっていくにつれてその自覚も芽生え、積極的に学びながらそれを楽しむ姿勢が形成できたと感じています。4年次からは研究者として教授陣と対等に議論を交わすことで、講義をただ受けていた3年次までとは異なり、大人になったような感覚がありました。

研究の成果としてこの3月に学会で発表をさせていただき、そこで他大学の教授と意気投合して新たに研究を共同で行う話も出ているほか、今年10月には国際学会への参加も決まっています。

さらに、この専攻での学び以外に、教職課程と新渡戸カレッジ(北大独自の国際リーダーシップ養成プログラム)も修了しました。並行して合計60単位以上を追加で履修するのはとても苦労しましたが、資格が手に入ったことやこれらを同時に全て修了した人が全学で見ても極めて稀有であることから、とても誇りに思っています。

総じて、自信を大きく成長させたかけがえのない4年間だったと確信しています。

東京大学 大学院 新領域創成科学研究科
修士2年 Y.Yさん

私が大学院に進学すると同時に、所属の研究室が東京の本郷キャンパスから千葉の柏キャンパスに移動になりました。そのため、前年度は千葉での新生活からスタートしました。柏キャンパスは広大な土地に緑も多く、落ち着いた環境で研究に専念できています。

学部の卒業論文を通して得た知識や反省を活かし、現在の修士課程では自ら考えたテーマで研究を進めています。前年度は3件の学会で研究成果を発表し、うち1件で優秀賞を授与されました。また今年の3月に論文を投稿し、現在査読中です。私は博士課程に進学し、現在所属している研究室で研究を継続する予定です。これまでは脳が記憶や認知処理を行う原理に興味を持って研究をしてきましたが、博士課程ではアルツハイマー病やてんかんなど、脳疾患のメカニズムを研究し、治療法の開発に繋がりたいと考えています。

最近は研究費の調達や国際学会の準備で忙しいですが、好きな研究を続けられる環境に感謝し、今後も真摯な態度で研究に向き合う所存です。

千葉大学 大学院 融合理工学府
修士課程修了 S.Nさん

大学生活を振り返ると、学業・研究・部活動と多方面で挑戦し、自分自身の成長を大きく実感できた時間だったと感じています。

学部時代は機械工学の基礎知識を深めるとともに、課外活動として千葉大学卓球部に所属し、4年から大学院1年時にかけては監督として選手の指導・育成に携わりました。選手一人ひとりの課題を見極め、適切なアドバイスを行う経験は、相手のニーズに合わせた最適な解決策を考える力を磨く貴重な機会となりました。

大学院では、さらに専門性を深め、数値流体解析を用いた門脈血流解析の研究に取り組みしました。千葉大学病院の医師の方々と共同研究を行い、門脈血栓症の発症リスクに関する新たな知見を得ることができました。この研究を通じて、論文執筆や学会発表を経験し、論理的に物事を組み立て、成果を的確に伝える力も身につけることができました。このプロセスを通じて、課題発見から解決まで粘り強く取り組む力を養うことができたと感じています。

このように、大学生活の中では、「自ら考え、行動し、成果を出す」力を培うことができました。大学2年からは新型コロナウイルスという未曾有の状況下での学生生活となり、様々な制限もあり、思うようにいかないこともありましたが、その限られた環境で努力し、楽しみを見つけ、新たにできた友人とともに充実した6年間を過ごすことができました。